

主張

本研究は、二次障害が強まったM児に対して愛着形成アプローチを行うことで、行動が改善するのではないかと考え、手立ての有効性を検証したものである。ADHDのM児は、本来有効であるはずのSSTや自己教示訓練などの支援では向上的な変容が見られず、かえって強い二次障害を引き起こした。そこで実践者はM児への支援が必要なのは愛着の問題であると見立て、愛着形成アプローチを試みることにした。M児に対して、認知・感情や行動・関係性に支援を行うことにより、M児の愛着心を育むことを通して、行動の改善につながるはずである。

本校のM児は、ADHDの診断を受け情緒障害学級で学んできた。SSTや自己教示訓練など従来の指導を行ってきたが、学年が上がるにつれ活動に参加しなくなり、度々担任に暴力をしたり、周囲の物を投げたり破壊したりして大暴れした。そのため学級はもとより、校内で孤立した状態であった。

そこで、特別支援学級担任経験が初めての実践者は、情緒という言葉が感情を意味することを知り、感情調整の支援としてカウンセリング理論を用いることとした。またM児が不安定になるまでの経過を観察し、愛着に課題があるのではないかと見立て、愛着形成アプローチを試みることにした。認知・感情と行動・関係性支援を行うことが、周囲の支持的風土を醸成することにつながり、同時にM児の愛着心を育み、行動の改善につながるのではないかと考え本主題を設定した。

研究仮説

二次障害の強まったM児に対し、愛着形成アプローチによって認知・感情と行動・関係性に支援を行うことで、M児の愛着心を育むと共に、周囲の支持的風土を醸成し、行動の改善につながるだろう。

(1) 研究内容

M児は、4年生の冬から校内のすべての集団活動に参加しなくなっていた。そして、担任を蹴るといふ暴力や、周囲の物を投げたり、ハサミを持ち出して周囲を歩いたり、ロッカーを蹴って穴を空けたりという粗暴な行動をするようになった。そして5年生の夏に、反抗挑戦性障害の診断を受けた。

M児には「強い自己顕示」「共同活動に参加しない」「乱暴で反社会的な言動」の3つに分類される二次障害が見られた。(資料1・2参照) 問題行動の根幹は自己否定的な認知によって愛着心が失われた結果、感情が乱れやすくなり、周囲との関係づくりを回避していることにあると捉えた。本実践では、M児に認知・感情・行動・関係性に対して愛着形成アプローチを行い、周囲への愛着心を向上させようと考えた。そしてM児が「共同活動への参加」「乱暴な言動の減少」「自己開示による苦手活動への参加」をもって行動改善したと捉え、愛着形成アプローチの効果を検証する。

(2) 研究の方法

愛着とは、特定の人に対する情緒(感情)的な絆である。愛着の形成は、生涯にわたって発達するものとされている。M児の自己否定的な認知を改善し、周囲への愛着心を形成するため以下のよう愛着形成アプローチを行う。そして、日々の記録に基づくデータの変容から検証する。

①認知・感情支援

- ・カウンセリング理論に基づくメタ認知の変容支援
- ・認知・感情の先取り支援

②行動・関係性支援

- ・役割付与支援
- ・連携支援

3 実践の概要

(1) 認知・感情支援について

① 認知・感情支援の実際

ア) カウンセリング理論に基づくメタ認知の変容支援

M 児は「家でライオンを飼っている」「自分は AC ミランに所属している。」「俺はタジキスタン軍の軍長をしていた。」等の壮大な虚言を高い頻度で言ったり、腕にタトゥーを描いたり、髪を絵の具で染めたりする行動が見られた。これらは、自己肯定感が低いため、強く自己顕示を行い、周囲に対して心理的に過剰な防衛機制を行うことで、抵抗を示し、防衛しきれない状況になると乱暴をし始めていると解釈した。そこで、メタ認知を変容させるため以下3点のカウンセリング理論を基に、日々対話をした。

交流分析による not OK スクリプトから OK スクリプトへ転換する。(資料3 参照)

エリックバーンによれば、人は Life script (人生脚本) として同じ行動パターンをとることがある。その中で短期的に mini script (ミニ脚本) という行動パターンが見られるという。

M 児は「強くあれ」というドライバーで自分を駆り立てることで、無意識に「所属するな」「信用するな」という禁止令が発動され、本来の「人を信じたい」「一緒に過ごしたい」という気持ちと葛藤が起きていた。これは not OK の mini script を進んでいる状態であった。

M 児の mini script を転換するためには、「強くあれ」とドライバーを掛けている状態から、アロワーをかける状態(「ありのままの自分で良い」とする状態)へ転換させる必要があった。まず M 児が取り組んでみたいという活動を共にし、ありのままの姿の長所を探った。

抵抗・防衛の根本を探り、克服のための誘因を探る。(資料3 参照)

壮大な虚言やタトゥーは防衛機制の「同一視(なりたい者と同じになることで欲求を満たす)」が過剰に行われている状態と捉えた。その結果、集団活動に強い抵抗を示していた。

この状態を脱する誘因(克服に向かうきっかけ)を探った。M 児の優秀性に着目したところ、下級生を大切にしたり、得意なことの手伝いを頼むと率先して取り組んだりする点が見られた。

また、サッカーが好きであり、練習のためにプロ選手のテクニック動画を見ていたり、昼休みの下級生とのサッカーに加わったりしていたことから、技術向上の意欲があることが分かった。音楽が好きで歌が上手く、リズム感が良いことも分かった。これらを軸として対話を行い、抵抗・防衛を克服するための意欲向上の機会を探った。

一次感情を基に、本音を話す価値を感じさせる。(アサーションへの導き)

観察の中で、M 児は一次感情である悲しみや恐怖を、二次感情である怒りによって覆いかぶしていることが分かった。さらに自分の非を受け入れる辛い状態を避けるために、強がったり居直ったりするなど、攻撃的になっており、相手を支配・征服し、軽蔑する傾向にあった。(躁的防衛の実行) このことから M 児には、一次感情をそのまま伝え互いに共感・尊重して自己主張する喜び(アサーション)を味わわせ、さらに共感を得る体験を積ませる必要があると考えた。

M 児は、教室での対話は、声や様子が廊下を通る人や同じ教室で学ぶ下級生に目撃されることを怖れたため、体育館やグラウンドでサッカー等のスポーツをすることを望んだ。そこで、スポーツを共にしながら対話をした。この対話では、本音を話すことも多くなり、誘因を多く探ることができた。例えば「本当は給食を多く盛ってほしいとか、物を貸してほしいとか他の先生に言いたいけど、自分が言ってもどうせダメだ。」という発言があった。そこで「M さんの考えをそのまま伝えれば、ほほいつも叶うと思うよ。」と、思いをそのまま伝えることを促した。M 児は「いや、絶対無理だよ。」と反応したので、最初は担任が代弁して相手に考えを伝えた。

イ) 認知・感情の先取り支援

前述のように、スポーツを通じた対話や得意なことを見せてもらう中での対話で、M 児の得意なことが見えてきた。そこで「うまいね！これは絶対いいよ！今度やろう。」「上手だよ。今度1年生に教えてやってよ。」と、M 児が要求する前に提案するようにした。無理を強いるものではなく、M 児も自分は得意だと感じているであろう活動に限定し、先取りする形で提案した。また M 児が何かを要求してくるような場面になった際は「そろそろ言われると思ってたよ。」と伝え、担任は、認知や感情の先取りができることを感じさせた。

②認知・感情支援によるM児の変容

○共同活動への参加

担任と共に行う活動し、自分の得意なことを発見したことを通して、特別支援学級合同で行

っている朝の会に欠かさず参加し、日直も務めるようになった。そして、1年生の使っていたおもちゃと一緒に片付ける姿も見られるようになった。

○乱暴な言動の減少

暴れることはもちろん、タトゥーを描くことや髪を染めることが皆無になった。

○自己開示

担任を介して伝えた願いが叶うことばかりだったため、担任を介して様々な職員に考えを伝えるようになり、やがて担任を介さなくても進んで自分の考えを伝えるようになった。

③考察

M児の安心感が高まり、抵抗や過剰な防衛機制がなくなった。さらに、周囲の人々へ働き掛ける意欲が高まった。その結果、周囲の人々への信頼も高まり、困難な状況のとき、周囲に頼る行動ができるようになった。それによっていつでも安心して行動できる見通しを得ることができた。

(2) 行動・関係性支援について

①行動・関係性支援の実際

ア) 役割付与支援

サッカー教室講師役の役割付与

また週1回、特別支援学級合同の自立活動がある。サッカーが得意なM児に練習方法を尋ねたり、全体進行の指示を出したりさせた。

児童会祭りへの出演

音楽が好きで、タブレット端末で動画サイトを見て歌っていた。やがて、コロナ禍でしばらく開催されなかった地域の小須戸祭の映像を見つけた。その和太鼓演奏に魅力を感じていた。そこで練習してみることを推奨し、プラスチック樽や段ボールで太鼓を作って練習した。その練習は夏休み中も続き、動画投稿形式の児童会祭り（小須戸っ子祭り）に参加した。ロイロノートスクールの資料箱に太鼓の動画が入り、児童のみならず保護者も視聴し、好評を博した。また、登校見守り隊の皆さんや緑化ボランティア等、学校に来校するお客さんにも披露し、拍手で称賛を受けた。

イ) 連携支援

M児は手伝いや力仕事がとても好きであった。そこで校内の職員にM児に手伝いを依頼するよう連絡し、支援の連携を試みた。職員は畑づくりや机や椅子の移動などをM児に依頼し、感謝した。担任はM児が称賛される場を設定した。翌日の朝の会などで取り上げて褒めた。視覚的により実感をもたせるために、ロイロノートやkeynoteを使ってM児の活躍を伝えた。

さらにタブレット端末で撮影したM児の活躍する写真を廊下掲示板に掲示し、周囲の児童に長所を知らせた。幸い教室前の廊下は、体育館に行く児童が必ず通るため、全校児童が必ず通る機会があり、M児の活躍を幅広い学年の児童に伝えることができた。これによってM児への支持的風土が醸成されていった。

月1回、M児の両親や校外の支援者全員が集い、連絡会議を開いていた。担任はM児の校内での活躍や支援内容を連絡した。このことが、校外での支持的風土醸成のみならず、校内外の支援者が情報を共有し、類似した声掛けや支援を行うことにより、M児が校外でも共通した見通しを持ち、安心感を持って過ごせる環境を整えることができた。

②行動・関係性支援によるM児の変容

○共同活動への参加

廊下掲示や連携によってM児と休み時間に遊ぶ児童が増えた。1年生と一緒に鬼ごっこをしたり、昼休みには高学年児童とサッカーをしたりして充実した表情で過ごすようになった。同学年の児童と遊ぶことが多くなったことで誘われるようになり、修学旅行事前準備や卒業プロジェクトを中心に6年生の活動に気持ちを向け、参加することが多くなった。

○乱暴な言動の減少

気持ちが乱れた時も「先生、落ち着く部屋に行ってきます。」と言って入っていき、落ち着くとすぐに活動に戻るようになった。休み時間に同級生や下級生と遊んでいる際、心無いことを言われても怒らず、休み時間終了後に担任に落ち着いて事情を報告することができるようになった。

○自己開示

どの職員にも、自分から進んで考えを伝えることができるようになった。また以前は怒っていた我慢や妥協、急な変更を要求される場面でも「いいですよ。」と快く応じるようになった。

③考察

M児の長所が発揮され、人々に伝わることで支持的風土が醸成された。それに伴ってM児の自己肯定感が高まった。さらにM児が一生懸命に取り組んだことを周囲の人々も称賛したことで、M児の心理に自己一致を生み、高い達成感を生むことができた。これらの経験の積み重なりにより、M児に安心感が生まれ、以前は受け入れられなかった困難な状況も受け入れられるようになった。

4 成果と課題

○成果

- ・ 壮大な虚言やタトゥーを入れる行動、危険な動画を見るのが著しく減少した。
- ・ 暴れる回数が昨年度38回から4回と減少した。特に6月以降は0回となり、安定した心理で行動することができた。
- ・ 周囲の人々がM児の長所を知り、親和的になったことで、全体的にM児周辺環境が穏やかなものになり、安心して共に過ごすことができるようになった。

●課題

- ・ 学習活動に取り組むことにまで高めることができなかった。M児の良さを各教科の内容と関わらせて伝え、より各教科の学びに近づけるアプローチを多くする必要があった。